

## 海外調査と地図

寺 阪 昭 信

昨年の夏、4年ぶりにトルコに調査に行った。先進国以外の地域での海外調査においては、地形図を利用できるということはほとんど期待できない。普通、町の中で入手できるのは簡単な観光用の地図にすぎない。それも3大都市を別にすると書店に市販されているわけではなく、観光協会に行かねば入手できない。中心部のみがざら紙に印刷されたものである。縮尺などはもちろんない。方位が記入されていれば御の字である。それに必ずしも図全体のスケールが統一されているわけでもない。それすらもない都市が多い。したがって、町を理解するのには歩き回らねばならないから、大変時間がかかる。

こうした状況は駅の売店などでも簡単に都市図が入手できる先進諸国と著しく異なる。もちろん、2.5万分の1や、5万分の1地形図は軍によって作成されているために、極秘扱いであり、一般の目に触れることはない。われわれ外国人が入手するのは、はなはだ困難である。大学の地理学教室においても一応は揃っているようであるが、自由に利用できるわけではない。ごく一部の必要な箇所をちらっと拝ませてもらえる程度である。

小縮尺の地図になるともう少し規制は緩やかになる。1981年の調査のときには、協力してくれた大学の助教授が軍に顔が効くとのことで、25万分の1の地図が手に入るといわれて大いに喜んだ。しかし、極秘とは書かれていないものの、一枚一枚の地図に赤字でナンバーが打たれており、コピーをしたり、国外に持ち出すのは憚られた。現地で地図を広げるとか、移動にさいして地図を見ながらというわけにも行かなかった。この学生が卒業論文のためのフィールドにでる準備に25万分の1の地図をトレーシングペーパーに懸命に写しているのも地理教室の図書室でみかけたことがある。このスケールの地図さえもそう自由にはならないのである。結局、われわれが自由に使えるのは50万分の1以上の縮尺に限られる。

それゆえに、地図に対する訓練が地理の専門家にも欠けているように見受けられる。一緒に旅行をしてみると、彼らははなはだ土地感が悪いのに気付く。

ところで、今回の調査にはかつて学振の研究者としてアンカラに1年間、家族とともに住んでいたことのある堀川徹氏（京都外大、歴史学）が加わっていた。したがって、彼にはトルコ人の友人がたくさんいたが、そのうちの1人にインテリの魚屋さんがいた。大学紛争のころ勉強を止めてしまったとのことである。

一晚3人で飲んだことがある。私はもっぱら堀川さんと魚屋さんとのトルコ語による会話を聞く役にならざるを得なかったのであるが、たまたま、86年のチェルノブイリの事故の話におよんだ。黒海が汚染されてしばらくの間、漁業活動が制約を受けていたこと、また市民も魚を食べなくなったことで、半年ほどの間、魚屋としては大変な打撃を受けて苦しかったことを述べていた。一言説明しておく、内陸都市であるアンカラには、主に黒海から魚が運ばれてくるのである。ソ連がけしからんというように非難するのではなく、大切な海が汚されたということにより、生活の場が奪われたことに対し、深い悲しみをたたえたような話しぶりであった。

テーブルのうえにあった、紙ナプキンをとってこれに図解をしてもらった。ところが彼の描くトルコと黒海の地図が実にうまいのである。さらに、驚くべきことには、日をおって放射能で汚染された範囲が拡大して行く様を鮮やかに書いて行くのであった。それだけ深刻な影響を受けたのだということが理解できた。私は授業でよく日本地図や世界地図を学生に書いてもらっている。その基準から察するに、これはなかなかの能力の持ち主だと見た。いろいろなトルコ人に地図を書いてもらうことができれば、大変おもしろいと思うのだが、そのような機会は残念ながらまだない。

（流通経済大学）